

子どもの育ちと社会関係

—保育・幼児教育を学ぶ学生の教材研究をとおして—

加 藤 悦 雄

はじめに

子どもは他者や社会との善い関係が保障されてこそ、ゆくゆく育ちや幸福を経験することができる。本稿の目的は保育・幼児教育を学ぶ学生が、以上のような命題を、小説や絵本など学生に身近な作品の中に見出し、それらをテキストとして読み解くための視点を提示することである。

そこで、子どもの描かれた小説や絵本など幾つかの作品を取り上げ、子どもの社会的孤立や他者との関わりの記述された場面を分析し、子どもの育ちと社会関係との関連について考察する。あわせて子どもを社会的に包摂 (social inclusion) し、豊かな社会関係を創造することが、子どもの育ちの要件であることを明らかにする。

そして保育や幼児教育を学ぶ学生が、作品に描かれた子ども達への洞察を足がかりにして、今を生きる現実の子どもを認識するひとつの視点を培うことができればよいと考えている。

1. 子どもの福祉を実現する視点

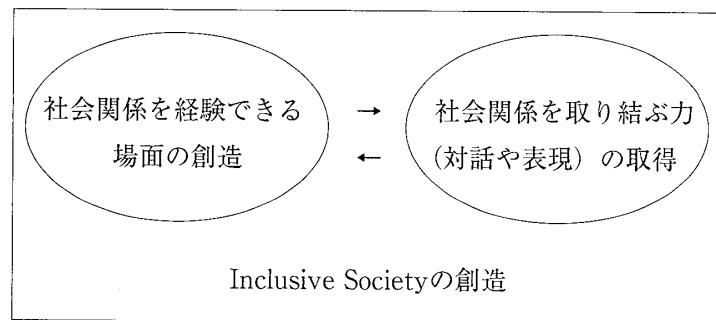
ここでは作品の分析に先立ち、充溢した子ども期、すなわち子どもの福祉実現の要件について確認していく。子どもの福祉 (well-being) 実現には、主として「育ち」の保障、そして「幸福」の保障という二つの要件が含まれると考えられる。前者は、文化的社会に生きるための能力や技術を身につけることであり、後者は、子ども一人ひとりが生きる喜びを十分に経験できることに主眼が置かれる。

そして重要なことは、いずれの要件を満たす上でも、他者や出来事との豊かな関係 (つながり) という契機を、恐らくは欠かすことができない。言わば、「子どもは他者や社会との善い関係が保障されてこそ、ゆくゆく育ちや幸福を経験することができる」と考えられるのである。それでは豊かな社会関係を保障するには、どのような取り組みが求められるのだろうか。

ひとつは、子ども達が等しく社会関係を経験できる「場面」を創り出すことである。そしていまひとつは、子ども自身が社会関係を取り結ぶ「力」を高めていくことである。言わば、子ども達は良好な社会関係を経験できる場面を提供され、そこで表現し対話する力

など関係を取り結ぶ力を身につけ、さらにその力を用いて新しく他者や社会と出会い、「つながり」を築いていくのである（図1）。

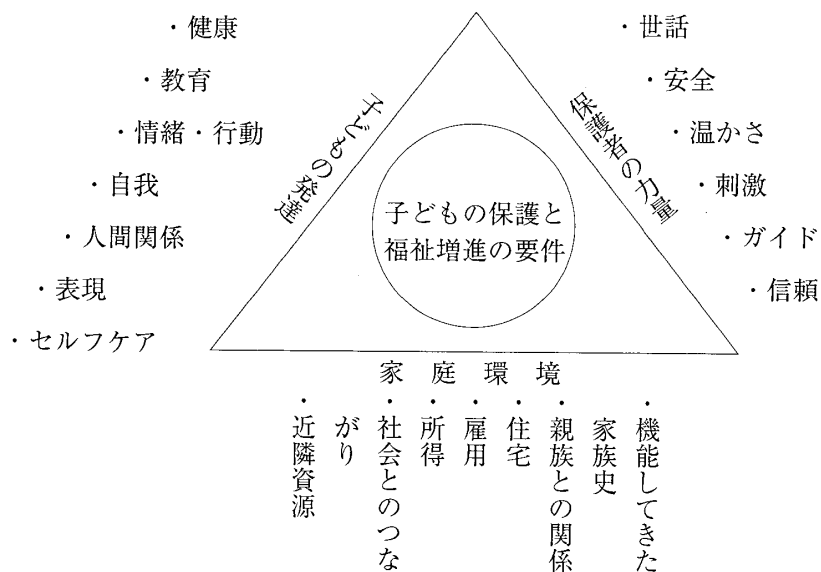
図1．子どもの福祉（well-being）を実現する視点



さて、以上のような福祉実現の手段に社会関係やつながりを重視する視点として、近年「社会的包摂（social inclusion）」の考え方が注目されている。社会的包摂とは「社会的排除（social exclusion）」、すなわち金銭的欠乏（貧困）のみならず、市民として当然保障されるべき多元的な社会システムとのつながりが、動態的に剥奪された状態（Jos Berghman1995：20－21）に対して、改めて社会システムとのつながり（社会関係）の回復を目指すアプローチのことである。

それでは子どもの社会的包摂を目指す上で、どのような社会システムとのつながりが想定されるのだろうか。John Piersonは「子どもの保護と福祉増進の要件」として、その多元的側面を考慮した見取り図を示している（図2）。

図2．子どもの保護と福祉増進の要件



出典：John Pierson2002：72

また武川正吾は、「福祉国家の諸制度の基底によこたわる価値」として「連帯」と「承認」を挙げているが（武川2007：52）、こうした価値を実行する再分配の諸制度や基本的人権の保障等とあわせて、これらも人びとの社会的包摂を目指す根源的な取り組みとして着目することも可能だろう。

さて以上を前提に、現在の子どもを取り巻く社会環境を顧みると、社会関係やつながりに関連する各種問題が見られる。例えば、保護者間の養育力格差と「児童虐待」の増加、自由な遊び場の減少と集団遊びの衰退、さらにいじめ・不登校・ひきこもりの深刻化など、子ども達から善きつながりの契機を奪うような複数の現象が認められる。つまり大人社会に色濃く認められる格差・孤立・貧困問題（social exclusion）が、直接子どもの養育環境に格差や悪影響をもたらしている。そして、子ども同士のつながり（豊かな子ども社会）は十分培われず、子どもの社会的孤立（独りぼっち）を促していると考えられる。

そこで次節では、社会関係から排除される子どもの姿、そして社会関係の中に生きる子どもの姿を、本研究のテーマである小説や絵本などの「作品」を紐解くことで具体的に見出していく。なお今回提示する作品は、先行研究を踏まえたものではなく、自らの教育経験で活用した作品を思い付くままに紹介するものである。優れた作品を介して、子どもに必要とされる社会関係の実相に、思いを馳せることができればよいと考えている。

2. 「作品」に描かれた子ども

(1) 社会関係から排除される子どもたち

「児童虐待」をモチーフとした小説「ふらんだーすの犬」は、橋本治の短編集『蝶のゆくえ』の冒頭に収められている。この小説の主人公は若い母親美加であり、物語は美加の結婚生活を中心に描かれていく。しかし、この物語の舞台が児童虐待の行われた家庭であることから、作中にはその他極めて限られた人物しか登場しない。本稿では、美加の幼子である孝太郎が虐待（社会的排除）に晒されていく要因を中心に、この物語の内容を辿ることにする。

高校生であった美加は二つ年上の俊一と出会い、やがて妊娠し、高校卒業と同時に結婚することになった。若すぎる結婚でも「格別に反対する人間はなかった。賛成する人間もなかった」（橋本2004：12）という記述から、妊娠そして結婚という一連の出来事と決断に、両親をはじめ特段の配慮や関心を払う者のなかったことが示唆されている。そして孝太郎の誕生は、結婚以来恋人同士のような二人の関係を破局へ追い込んでいく。その背景として、「母」として変化していく美加の姿を受け入れない俊一の姿や、周囲の人びとと反発し孤立する若い母子の姿が、次のように描かれている。

「アパートのドアを開けると、若い女の甘い体臭が強くなる。子供が生まれてから、

それが強くなったように思う。若い女の体臭の中に、子供の乳臭さだか汗臭さが混ざって、それが不機嫌な違和感を作り出す。若い妻が不機嫌でいることを、若い夫はよく知っていた。なぜかと言えば、まず自分自身が不機嫌になっているからだ」(橋本2004：10)。

「子供を産んだ美加は、俊一の知っている美加とは別人になっていた。知っているはずの女が、時々「知らない女」のように思えた。その「見知らぬ女」が、俊一に「哺乳壺を温めろ」とか「ゴミ出しをしろ」とか言う。なぜ自分がそんなことをしなければならぬのかと思って拒むと、美加は黙って俊一を睨みつけ、立って、なすべきことを自分でする。孝太郎が生まれて二ヶ月もしない内に、美加の哺乳壺の扱い方はとげとげしくなった」(橋本2004：13)。

「一日を幼い子供と過ごす妻は、外との接触に飢えていた。自分が子供とかかずに合っている間に、自分は世の中から取り残されてしまうような気がしていた。外へ買物に行っても、子供がいるからすぐに帰って来なければならない。子供を抱えている自分を、自分と同世代の人間達は振り向かない。時々、汚い婆ァだけが関心を示して寄って来る。「孤独なんだろう」と美加は思った」(橋本2004：11)。

その後、俊一は女子高校生の恋人ができたことを契機に、二人の暮らすアパートに帰らなくなり、ついに実家へと戻ってしまう。取り残された美加と孝太郎は、しばらくしてアパートを引き払い、母親の暮らす実家に帰ることになった。しかし美加とその母親である美佐江との関係は、孝太郎の養育をきっかけとして決定的に拗れてしまう。美佐江は曲がりなりにも四人の子どもを育て上げた育児の経験者である。美加は次のように感じている。「『自分の母親は子供好きだった』と思えるような記憶が、一つとしてない。にもかかわらず、かつては眉間に皺を深く刻んで怒鳴りまくっているだけだった女が、今はやすやすと赤ん坊をあやす」(橋本2004：21)。

そして「おら、それじゃ泣くよ」「その抱き方じゃ、泣きやまねーよ」「おしめ代えろ」「手つきが悪い」(橋本2004：21)など、娘の気持にはおかまいなしに指図をする美佐江の言動は、孝太郎を養育しようと試みる美加の思いを根底から挫いていくものであった。結局美加は孝太郎を母親に預け、働きに出た末、アパートを借りて実家を飛び出してしまう。母親とも幼子とも新しい絆を結べなかった美加は、パート先で出会った二歳年上の幸信と同棲を始める。やがて相手から結婚を持ち出された美加は、「これでだめになるかもしれない」と思いつつ自分に子どもがいることを告げる。

「いいじゃん、別に」。幸信によるこの言葉を、美加は再婚の自分を気遣う言葉として受け止め、信じられない幸福感で満たされた。しかし当の幸信はただ単に、「子供がいる」ことに対する想像力が欠けていたがゆえの反応だったのである(橋本2004：24)。そして孝太郎は小学校入学の前日に、祖母の下から、母とともに新しい父の居るマンションへ

越して来た。しかしこれから一緒に暮らす美加と幸信はいずれも、子どもを守り配慮するだけの強さを持ち合わせていなかった。

それでは当初二人にとって孝太郎は、一体どのような存在だったのか。まず「幸信にとって、世界中に「子供」というのは自分ただ一人で、それ以外の子供は、自分のテリトリーを荒す邪魔者でしかなかった。邪魔者は存在しない」（橋本2004：32）という記述から、幸信にとって孝太郎は自らのテリトリー（ここには唯一自分のみを気にかけてくれる美加も含まれる）を侵しさえしなければ、まるで空気のように透明な存在に過ぎなかった。また一方の美加からすると、孝太郎は「面倒くさい」存在であり、なるべく面倒にかかずらわない対応に終始したのである。例えば、階段で怪我をして泣く孝太郎の頬を殴る、保健室で処置された湿布薬やネット包帯を「大袈裟だ」として引き剥がす、もちろん病院には連れて行かない、朝起きて食事の仕度をするのが面倒なので「学校に行かなくていい」と言う、五月の連休を二人で過ごすため孝太郎を祖母に預ける、など。

その後孝太郎という存在が、幸信にとって自分のテリトリーを荒らす邪魔者として意識され、また美加によって仕様もなく面倒な存在に見られ始めた時、孝太郎は度々ベランダに出されるようになり、いつの日かベランダは「孝太郎専用の区画」となっていた。すなわち、「なにかあると、孝太郎はベランダに出されるようになった。声を出すと、次の日の食事が抜かれた。その内には、声を出さなくとも、ベランダに出された次の日には、食事が与えられなくなった。ベランダに出された次の日には、ぐったりとして学校を休んだから、食事は与えられなくてもいいように思われてしまった」（橋本2004：46）。

そんなある日のこと、かつて祖母から買ってもらい、孝太郎の全財産（おもちゃや絵本など）の入った黄色いリュックサックから、一枚の写真が発見される。それは美加の最初の結婚式の写真であった。孝太郎にとってこの写真は「やさしいお母さん」の象徴であり、大切であるからこそずっと密かに所持していたのである。「現実には「美しい」とも「やさしい」とも思えない母親が、結婚式の写真の中では、美しくやさしく、人を迎え入れるような愛情に満ちた顔で、慎ましく微笑んでいる。その人が自分の母親だと思えば、孝太郎はほっとした。「やさしくてきれいなお母さん」がそこにいると思えるので、孝太郎はその写真を見るのが好きだった」（橋本2004：10）。

しかしこの写真を幸信が発見され、問い詰められた美加は、一時幸信に対する羞恥心と罪悪感に苛まれた挙句、反転された怒りの矛先を、写真を保持していた孝太郎に一挙に向けたのである。そこには葬り去ろうとした過去の記憶を、突如として暴露されたことへの怒りも含まれていた。幸太郎の心情に気付かない美加は、突き動かされるように段ボール製の「小屋」をこしらえた。そして学校から帰ってきた孝太郎を縛り上げ、口にガムテープを貼り、肌寒いベランダの小屋に放り込んだのである。その日を境にして、

幸太郎という存在は、二人の視界から完全に排除された。

さて、それから数日後の出来事である。このような仕打ちを受けた孝太郎はそれでもなお死の間際、看護師の温かい掌にお母さんのやさしさを感じていたのであった⁽¹⁾。

次に、重松清の長編小説『疾走』には、現代社会に生きる少年と少女の「生」の苦しみが描かれている。少年の名前はシュウジ、そして少女の名前はエリという。二人の家庭はそれぞれ、兄が連続放火犯（地元ではそれを「赤犬」と呼ぶ）で逮捕されたこと、そして両親が一家心中を図り一人生き延びたことを契機に崩壊し、二人は言わば出口のない孤独の淵に立たされていた。そんな「運命」を背負わされた二人が、地元にできた教会とその神父宮原を介して出会う。「言葉が、あなたをつなぎ止めてくれます。聖書には、にんげんをこの世界につなぎ止めてくれる言葉が、たくさんあります」（重松 2005A：172）。宮原は過酷な運命によって、社会における根を失いかけていた二人を繋ぎ止め、生き続けることの根拠や実りを恢復してほしいと願っている。

このようにして二人は出会い、そして別れ、二年の歳月を経て再び出会う。そこでエリは幻覚にうなされるシュウジの姿を目の当たりにし、彼が人に陵辱され人を殺したこと（人に傷つけられ人を傷つけたこと）で、人格が崩壊するような苦悩に苛まれていることを知る。エリは恐らくはシュウジをこの社会に繋ぎ止めるために、今でもなお絶望しか汲み取ることをできない自らの生い立ちを、エリ自身の「言葉」で次のように語ったのである。

「エリは「わたし」という言い方をしなかった。弱い子—と自分を呼んだ。弱いお父さんと弱いお母さんから生まれた弱い子の物語だった。弱い街に生まれて、別の弱い街で暮らして、さらに別の弱い街に移り住んだ少女の物語—エリはそんなふうに言ってベッドの縁に腰かけ、寂しそうに笑った。（中略）弱い夫婦は結婚してほどなく、女の子の赤ちゃんを産みました。（中略）」

「赤ちゃんは弱い。弱いから、強いおとなが守ってあげなくちゃいけないの」。エリは「でもね」と話をひるがえす。「あの家族はそうじゃなかった。赤ちゃんは弱すぎたし、お父さんもお母さんも強いおとなじゃなかったの」おまえはもうなにも言わない。ソファに深く座り直して、弱い家族の物語のつづきを黙って待った。

弱い夫婦は、弱い両親でもあったのです。赤ちゃんの命を背負ったり抱きしめたりするための最低限の強さすら持っていない人たちでした。赤ちゃんは、夜中によく泣きました。そのたびに父親は怒鳴りました。怒鳴り声をぶつけられたら赤ちゃんはあっという間に激しく泣いてしまう、そんな簡単な理屈すらわからない愚かな父親でした。

母親も愚かです。泣いている赤ちゃんを泣きやますには、母親は笑ってあげなければ

ならないのに、あのひとは自分まで泣いてしまうのです。赤ちゃんを抱いて、ごめんなさいごめんなさい、エリを許して、この子を許して、と謝りながら泣くのです。

母親は、赤ちゃんを抱くことが親の愛だと信じきっていました。でも、抱きしめながら泣いてしまうと、泣き声や嗚咽が、赤ちゃんに直接響いてしまうのです。耳で聞くのではなく、胸に押しつけられた肌から受け取ってしまうのです。すすり泣きの声はか細くても、胸の音は、ごうごうと、ぼうぼうと、怖いほど大きく響くのです。

ほんとだよ、嗚咽のしゃっくりなんか、地面がひっくりかえるぐらいなんだから。あんたは知らないと思うし、いまから再現しようとしても無理だよ、だって、もう、あんたもわたしも、赤ちゃんみたいな小さな体じゃないんだから。

だって、計算してみてもよ。わたしね、生まれたときの体重は二千八百グラムだったんだって。で、いま、四十二キロあるのね。割り算してみたら、いくらになる？十五倍でしょ、ね、生まれたときの十五倍の体になってるわけ。だったら、赤ちゃんの体はいまの十五分の一で、ってことは、すべての刺激が、いまの感覚の十五倍で来ちゃうわけ。嬉しい刺激も悲しい刺激も、幸せな刺激も不幸な刺激も。

……理屈じゃないってば、そんなの。覚えてるとか記憶に残ってるとか、理屈じゃないんだってば。肌に染みてるの。ごうごう、ってね、濁流みたいな音が、もう、あの子の肌には染みついているの。……つづけるね。

弱い夫婦は弱い両親になったのと同時に、貧しい両親にもなってしまいました、赤ちゃんが生まれたので、母親がパートの仕事を辞めてしまったからです。父親の仕事は工員でした。三交代制の大きな鉄工所で働いていたのです。給料は安かったし、父親はお酒とギャンブルが好きだったし、赤ちゃんは夜泣きするだけでなく、しょっちゅう熱を出して病院に通っていました。父親は、しだいにいらだってきました。子どもが生まれれば幸せになれるはずだったのに、現実は逆だったからです。(中略)

新婚時代も生活は楽じゃなかったはずだけど、それでも夫婦二人で働いて、少しずつお金も貯まって、テレビを買い換えたり、車を買換えたり、アパートをもう少し広い部屋に引っ越したりして、「自由」を広げていきました。でも、赤ちゃんが生まれると、せっかくいままで広げてきた「自由」がいったんにしぼんでしまいました。(中略)

寝てほしいのに寝てくれない、起きてほしいのに起きてくれない、食べてほしいのに食べない、触らないでほしいものにかぎってすぐに触る、おしっこやうんちもオシメに垂れ流すし、ちょっと体調を崩すとすぐに熱を出すし、這い這いを始めると目が離せないし、歩きだしたらもっと目が離せないし、しゃべるようになったらうるさいし、部屋の障子はびりびりに破いちゃうし、襖や壁に落書きもしちゃうし、どんなに言っても理屈がとおるわけがないし、お金ばかりかかるし、最後の最後は泣いちゃっておしまい…。

こんなのじゃ、なんのためにガキ産んだんだかわかんない、だって。覚えてないけど、

胸に染みてゐるから、その一言。なんのために、って。自分のために、だね」(重松 2005B:259-264)⁽²⁾。

そしてエリの両親が死亡し、その後親戚の家に引き取られ、そこで受けた悲惨な出来事(性的虐待)についても語られた。シュウジはエリの言葉を最後まで聴き入れ、体内の奥深くで受け止めたのである。この夜の出来事が契機となり、二人にとってお互いの「存在」そのものが、この「社会」で生き続けるための根拠、さらに生きた痕跡となっていく。なぜならエリは唯一シュウジを宛先に物語を発送し、シュウジは確かに彼女の物語を受け取ったからである。二人はこの先も厳しい生き方を余儀なくされていく。しかし、一度は社会から排除され見捨てられた二人が、強い絆によって再び社会に帰還した後、他者を守ろうとする思いに貫かれた二人の生き方はとりわけ印象深い。

さて、この小説の構造的な特徴として、シュウジの人生(運命)をメタ物語的な視点からものがたる、伴走者の存在(→もうひとつの世界の存在)を指摘できる。すなわち小説に描かれたシュウジ(そしてエリ)を巡る人生を、言わば神の視点から、いつ如何なる時も見守り続ける語り手が存在する。その結果、シュウジの一回限りの「生」のもつ「かけがえのなさ」が強調されると同時に、現世においてシュウジが孤独を感じていた時も、実はいつも孤独でなかったことが暗示されるのである。

(2) 社会関係の中に生きる子どもたち

「赤ちゃん、笑えない!「あやしても反応なし」6~13%」、この記事(朝日新聞大阪)の冒頭で、次のような説明がなされている。「にこにこ、きゃっきゃっ、さっき泣いたのに、もう笑顔。それが赤ちゃん。ところが最近、保育の現場で、抱いてもあやしても笑わない赤ちゃんが目立ち始めた。少子化や核家族化で、親の孤立感が高まっていることが影響しているようだ」(朝日新聞2005)。

それでは親の孤立感と反応の乏しい赤ちゃんの出現は、どのように関わっているのか。赤ちゃんはいまだ言葉を自由に操れないが故に、泣く・笑う・声・表情・身振りなど、限られた身体表現を駆使して、他者に自らの欲求や思いを伝達し、応答や共感を求めようとする。これは乳幼児が自らの生存や実存を培う上で、言わば欠かせない手続きである。

しかしながら、赤ちゃんの周囲にいる他者(親)が、もしも一人きりで孤立していたり、赤ちゃんの細かな表現に気づき、それを読み取る力を持ち合わせていなければ、結果として赤ちゃんの欲求や思いに、十分応えられないことが予測できる。また赤ちゃんの立場からすれば、表現しているにも拘らず、それが相手に伝わらず、ましてや欲求の充足や共感すら得られないとすれば、「笑わない」など自ら表現することを断念してしまう可能性も考えられる。

さて乳幼児は特定の年齢に達しさえすれば、自主的・自立的に笑ったり、遊んだり、歩いたりするわけではない。子どもの表現など「主体性」の発揮には、周囲の人との関わり合いが欠かせないのである。主として親子関係の分析に基づく「関係発達論」の考え方によると、子どもは二つの主体性を生きる存在であることが示されている。ひとつは、周囲の肯定的な映し返しをバネに、自分の思いを貫いていく主体性であり、いまひとつは、共に生きる喜びをバネに、みんなで一緒にいること（つながり）を求める主体としての生き方である。そしていずれの主体性を発揮するためにも、周囲にいる大人や仲間との関係が欠かせないことが明らかにされている（鯨岡2004：14-16）。

それでは以上を踏まえて、マリー・ホール・エッツ作『赤ちゃんのはなし』を紐解いてみよう。この絵本には胎児が子宮の中で徐々に成長し、やがて巣立ちを迎え誕生する様子が子細に描かれている。そして、「子どもに生命がどう育つのかをやさしく科学的に語り、しかも誕生の美しさと歓びを感じさせてくれる絵本の傑作」（松居2003：7）と評価されている。ここでは特に、赤ちゃんが病院から家に帰ってきた後の様子を垣間見ることにしよう。

「はじめて赤ちゃんが家に帰ってきたとき、小さいきょうだいたちには、ぐるぐるまきにした毛布しか見えませんでした。それから、かた方の目と、小さな鼻が見え、毛布をゆるめると、手がふたつ見えました。指が動いています。顔がすっかりのぞき、かみの毛も見えました。おとうさんがいったとおり、顔にはしわがあって、おじいさんのようです。それでも、ふたりは、赤ちゃんがとてもすきになりました」（Ets1982：54）。

「朝、おにいちゃんとおねえちゃんは、赤ちゃんが、おふろにはいるのを見ました。もう、おなかにばんそうこうはありません。へそのおはとれて、あとに、おへそがのこっているだけでした。

おふろは、赤ちゃん用のふろおけを使いました。赤ちゃんは、頭をあらわれるのがきらいです。手をふりまわし、のがれようともがきます。手のひらをひらかせて、にぎっている毛布のわたごみをとろうとすると、いやがります。いきなり、水をけりつけて、まわりのみんなに、しぶきをかけることもありました。

赤ちゃんがいちばんすきなのは、おふろのあと、のびをするときです。毛布の上で、まるはだかで、動物の赤ちゃんがするように、足をつっぱって、のびをします。でも、赤ちゃんが身ぶるいすると、すぐに、着物をきせられてしまいました。

まい日まい日、おにいちゃんとおねえちゃんは、赤ちゃんのそばへいきました。ふたりは、赤ちゃんにはなしかけたり、いないいないばあをしたり、顔にしわをよせてみたり、紙でシャラシャラ音をたてて、赤ちゃんをよろこばせようとしてしました。でも、紙で音をたてるときは、そうっとやりました。きゅうに音をたてると、赤ちゃんはこわがるからです。

まい日まい日、赤ちゃんはふたりをじっと見つめ、ふたりの声をじっときいていました。そのうちに、首をまわして、ふたりの顔をさがしたり、目で追うようになりました。けれども、見つめたり、きいたりしても、わけがわからないというように、かなしそうな顔をしていました。その目はいつも、ここはどこ？ぼくはどうしてここにいるの？ときいているようでした。

まい日まい日、ふたりの子どもたちは、あそんでいらっしやい、と外にだされても、げんかんのあたりで、うろうろしていました。おもての石だんにすわっていたり、かかとで地めんにあなをあけたりしていました。赤ちゃん、いつまでたっても、ここがすきになれないのかなあ？このうちがいやなのかしら？

なん週間かすぎました。ある日のこと、子どもたちは、いつものように、赤ちゃんのベッドのそばへいきました。ふたりは、いないないばあをして見せたり、顔にしわをよせて見せたりしました。それから、でたらめなことばにふしをつけて、うたってやりました。赤ちゃんが顔をこちらにむけました。じっとふたりを見つめ、じっときいています。

そのときです、そのでたらめのことばが赤ちゃんにつうじたのは。赤ちゃんは、その音が気に入りました。だって、おもしろい音だもの！

「ねえ、おかあさん！」子どもたちはさけびました。「ねえ、きて！」おかあさんも見ました。子どもたちは、おなじことをなんかいも、なんかいも、なんかいもくりかえしました。

そのあとで、あそんでいらっしやい、と外に出されると、ふたりはげんかんをかけぬけて、おもての石だんをとびおりました。さか立ちしようとして、ひっくりかえり、しりもちをつきました。草の上を、ころころころげまわりました。ふたりは、あおむけにねころがり、空にむかってわらいました。赤ちゃんがわらった！うちの赤ちゃんが！赤ちゃんがわらったんだ！」(Ets1982:56-58)。

ここには赤ちゃんが「はじめて笑う」までの出来事が、とりわけ赤ちゃんと小さなきょうだい（お兄ちゃんとお姉ちゃん）との関わりを中心に描かれている。赤ちゃんと二人のきょうだいは、互いに強い「関心」によって結ばれている。「赤ちゃんは、ふたりの顔を見つめ、じっときいています。(中略)もしかしたら、赤ちゃんは、ここがいやなのかな？このうちがきらいなのかしら？」(Ets1982:54)。

そして二人のきょうだいは毎日赤ちゃんの傍へ赴き、きとお父さんかお母さんに教えられたように、赤ちゃんを喜ばせようと注意深く話しかけたり、面白い表情をして見せたり、変わった音を聞かせたりする。二人のきょうだいは不安と期待を胸に待ち続けるのだが、赤ちゃんはその思いをずっと感じ取っていたのだろう。ある日二人にとって劇的な出来事が、当の赤ちゃんによってもたらされるのである。

このような子どもの育ちを巡る「重要な他者」との関係をモチーフとした絵本は、他にも数多く存在する。例えば、『しりたがりやの ふくろうぼうや』、『いいこって どんなこ？』、『ちびゴリラのちびちび』、さらに『わすれられないおくりもの』など。このうち『いいこって どんなこ？』は、うさぎのバニー坊やによる質問と、お母さんによる応答によって構成されている。子うさぎのバニーが大好きなお母さんの言葉を頼りにして、「いいこ」のモデルを描き出し、延いては「いいこ」としての自己（自我）を創造する物語である。お母さんはこうしたバニーの欲求を熟知していて、決して固定された「よい子像」を示すのではなく、バニーがありがちな自分の自分を好きになるように、自らの心情を交えつつ子どもを受容していくのである。

「「ねえ、おかあさん、いいこって、どんなこ？」うさぎのバニーぼうやがたずねました。「ぜったいなかないのが、いいこなのか？ぼく、なかないようにしたほうがいい？」おかあさんはこたえました。「ないたっていいのよ。でもね、バニーがいないと、なんだかおかあさんまでかなしくなるわ」「じゃあ、いいこってつよいこのこと？なんにもこわがらない、つよいこになってほしい？」「まあ、バニーったら。こわいものがないひとなんているかしら」」(Modesitt1994: 4-13)。

「「それじゃ、ぼくがもっとかわいいこなら、おかあさん、うれしかった？」「まさか！」おかあさんはくびをふりました。「バニーは、いまのまんまでいいの」」(Modesitt1994: 22-25)。

また『わすれられないおくりもの』には、子どもたちが現世で生き続けるために、失われた他者の記憶やそこで親身に授けられた知恵が、子どもの日々の生活を司るようにして甦り、生き続ける上で糧となっていく様子が描かれている。

「ウサギのおくさんのりょうりじょうずは、村じゅうに知れわたっていました。でも、さいしょにりょうりを教えてくれたのは、アナグマでした。ずっと前、アナグマは、ウサギにしょうがパンのやき方を教えてくれたのです。ウサギのおくさんは、はじめてりょうりを教えてもらった時のことを思い出すと、今でも、やきたてのしょうがパンのかおりが、ただよってくるようだといいました。

みんなだれにも、なにかしら、アナグマの思い出がありました。アナグマは、ひとりひとりに、別れたあとでも、たからものとなるような、ちえやくふうを残してくれたのです。みんなはそれで、たがいに助けあうこともできました」(Varley1986: 22)。

次に紹介する『さっちゃんのまほうのて』は、障害をもつ子どもの経験が巧みに綴られた作品である⁽³⁾。幼稚園に通うさっちゃんはある出来事を機に、友達と異なる自分の障害（先天性四肢障害による手の奇形）を急激に意識化する。そしてその「障害」の存在が大きく膨れ上がり、自己を否定する程に悩み抜くのだが、複数の他者による支持的

な出会いを介して、障害を宿した自分自身を受容し、自立していくプロセスが丹念に描かれている。なおこの絵本は他の絵本と同様、文章に対応した絵に、物語の機微が込められている。

さっちゃんは多くの子どもがそうであるように、現在妊娠しているお母さんに強いあこがれを抱いている。そして自分も「お母さんになろう」と決意するのである。幼稚園ではその折、ままごと遊びが流行っており、さっちゃんはある日思い切ってお母さん役を買って出る。このようにさっちゃんが自己を押し出した結果、普段からお母さん役をしているまりちゃんと激しく衝突してしまう。まりちゃん達はさっちゃんに、次のような言葉で反発したのである。

「「さっちゃんは、おかあさんにはなれないよ！だって、てのないおかあさんなんて、へんだもん。」まわりにいたゆきちゃんやなおこちゃんも、「そうよ！」「へんだよ！」といました」（田畑他1985：11－12）。

友達から投げ掛けられた言葉により、さっちゃんの心は大きな衝撃を受けた。なぜなら自分のこの指のない丸い「手」のせいで、お母さんになれないかもしれないからだ。さっちゃんの真剣な姿を目の当たりにした母親は、初めてさっちゃんに本当のことを明かすのである。

「おかあさんは、もうむねがいっぱいでした。だまって、さっちゃんをぎゅっとだきしめました。しばらくして、ちいさいけれど、とてもしんけんなこえでいいました。「さちこはね、おかあさんのおなかのなかで、はじめ、ちいさなちいさな、いのちのつぶだったの。そのいのちのつぶが、だんだんおおきくなって、てやあしやしんぞうができて、にんげんのからだになっていくの。でもさちこはそのときに、おなかのなかでけがをしてしまって、ゆびだけどうしてもできなかったの。どうしておなかのなかでけががなんかしてしまうのか、まだだれにもわからないの。」

「しょうがくせいになったら、さっちゃんのゆび、みんなみたいにはえてくる？」さっちゃんはおかあさんのかおをじっとみつめて、ききました。おかあさんはりょうてで、さっちゃんのをやさしくつつみました。とてもつらいことでしたが、おもいきっていいました。

「さちこのてはね、しょうがくせいになっても、いまのままよ。ずっと、いまのままよ。でもね、さっちゃん。これがさちこのだいじな、だいじなてなんだから。おかあさんのだいすきなさちこのかわいい、かわいいてなんだから……。」さっちゃんのめに、みるみるなみだがあふれました。「いやだ、いやだ、こんなていやだ。」おかあさんのめにも、やっぱりなみだがあふれました」（田畑他1985：22－25）。

この日を境にして、さっちゃんはたった一人で「自分」と向き合い始める。さっちゃんがお風呂あがり、鏡に映る自分の姿を凝視する一枚の絵が、それを物語っている。さ

て、それから暫くしてお母さんに赤ちゃんが生まれ、いよいよさっちゃんはお姉さんになった。初めて弟に対面した病院からの帰り道、さっちゃんはずっと考え続けていたことを、今度はお父さんに聞いてみるのである。「おとうさん。さっちゃんも、おかあさんになれるかな。ゆびがなくても、おかあさんになれるかな。」それに対するお父さんの回答は、お母さん同様揺るぎないものだった。「なれるとも、さちこはすてきなおかあさんになれるぞ。だれにもまけないおかあさんになれるぞ」(田畑他1985:32)。

それだけではなかった。さっちゃんはもう一つ、お父さんから素敵な言葉を受け取るのである。「それにねさちこ、こうしてさちこことをつないでいると、とってもふしぎなちからが、さちこのてからやってきて、おとうさんのからだいっぱいになるんだ。さちこのては、まるでまほうのてだね」(田畑他1985:33)。さっちゃんがお母さんになる希望を叶えるために、いつも足を引っ張っていた小さな丸い手は、この「魔法の手」という言葉と共に、言わばマイナスからプラスの象徴へと転化したのである。その後、さっちゃんの元を訪れた、あきらくんやけいこ先生による支持的なストロークを受け取り、さっちゃんは再び幼稚園に通い始める。すなわちさっちゃんにとって複数の人びとによる承認が、新しい自己を構成する上で不可欠な要件だったのである。

続いて、同じく障害をもつ子どもが登場するのだが、今回はその子どもと関わり合った周囲の子どもや養育者の心情の変化に、力点の置かれた作品である。灰谷健次郎の小説『兎の眼』の一節に、クラスの子どもの障害をもつ子どもと関わり合うことで、変化・成長していく姿が鮮やかに描かれている。ある年の十月、小学1年の小谷学級に、知的障害をもつみな子がやってきた。事情があって養護学校(発達支援学校)に入るまでの約1ヶ月間、新米教師である小谷先生のクラスで預かることになったのだ。学級におけるみな子の様子が、次のように描かれている。「みな子は朝、おばあさんにつれられて学校にくる。おばあさんに自分の席を教えてもらって、いちどはちゃんとすわるけれど、三分間とじっとしてられない。席を立ててあちこち歩く。友だちのものものをいじる。ときには消ゴムをくわえて、ごはんをたべるまねをする。「あかん、みなこちゃん」—と友だちにしかられると、きげんのよいときはクククッと笑って消ゴムをかえす。きげんのよくないときはポイと捨てる。それからまたうろうろ歩く。うろうろ走るときもある。みな子はたえずなにかをしたい。しかし、みな子がなにかをすると、それはたいていひとにめいわくをかけることであった」(灰谷1998:138-139)。

みな子から最も数多く迷惑を被っているのは、隣に座っている淳一であった。淳一はおとなしい子どもで、教科書を破られて泣きべそをかいだこともあった。しかし時が経つにつれて、みな子に対する子どもたちの態度が、身近な淳一を中心に、輪を描くように少しずつ変わっていく。「ノートをやぶられそうになると、淳一はあわてないで静かに

いう。「みなちゃん、ノートかえしてちょうだい」みな子はノートをやぶるときでも、やぶらないでかえすときでも、たいてい笑っている。ノートをかえしてもらおうと、淳一もにっこり笑う。そばで見ていると、ふたりでたのしいことをして笑っているようである。そして、淳一はいらぬノートを、みな子にわたして、「これ、やぶり」という」(灰谷1998：152)。

そしてある日の話し合いの時間、淳一は小谷先生に「みな子ちゃんの当番」を提案する。「どうしてぼくがそんなことをおもいついたか、おしえてあげよか。ぼく、みなちゃんがノートやぶったけどおこらんかってん。ほんをやぶいてもおこらんかってん。ふでばこやけしゴムとられたけどおこらんと、でんしゃごっこしてあそんだってん。おこらんかったら、みなちゃんがすきになったで。みなちゃんがすきになったら、みなちゃんにめいわくかけられてもかわいいだけ」(灰谷1998：154)。やがてみな子は小谷学級の一人ひとりの子どもに、居てもらわなくてはならない存在となっていく。しかしみな子との出会いがあれば、必ずみな子との別れの時間がやってくる。

3. おわりに―作品の宿す他者性と子どもの育ち―

われわれの生きる不思議な現実世界と、作家の織り成す想像力と構成力によって生み出された小説・絵本・映画等の作品には、平凡な日常を切り裂く出来事や、個人の価値観を覆す出来事などが、凝縮された形で描かれているものが多い。われわれはこうした作品に触れることで、時に自らの狭い経験世界からは窺い知ることのできない「生き方」と対面し、他者や自己への認識を新たにすることができる。そこで、ピーター・スピアーの絵本『せかいのひとびと』は、自分との共通点や相違点を宿した「他者」認識を、言わば直接的に促すような作品である。

「からだのかたちからしてちがうでしょ。大きい人、小さい人、中ぐらいの人。だけど生まれた時小さいのはみんな同じ。(中略)人間っておもしろいね。パーマをかけたがったり、まっすぐなかみにしたがったり。(中略)たいていの人はしんせつでいいひとだけど、中には悪い人も少しはいるんだ。(中略)お金持ちもいるけれど、多くの方はそうじゃない。とても貧しいくらしをしている人たちだって、たくさんいる」(Spier1980：6-27)。

「60おくいじょうの人間……わかい人や年とった人、病気の人や元気な人、しあわせな人や不しあわせな人、しんせつな人や不しんせつな人、強い人や弱い人、人びとはどこにでも住んでいる。そしてみんながそれぞれにちがっている。

ある人たちは、自分とちがっているというだけで、よその人たちをきらう。そんなことっておかしいよ。その人たちは、自分たちだってほかの人から見れば、ちがっているってことをわすれているんだ」(Spier1980：36-37)。

「人間は身分とか地位とかかい級なんていう、おかしなくみをつくってきた……。でもみんな同じ地球でくらしているんだし、同じ空気をすって、同じ太陽にてらされているんだ。そしてさいごにはだれもが死ぬ」(Spier1980:33)。

さて、恐らく優れた作品はモノログの世界に閉じ籠るのでなく、作品に触れる人びとに対話(ダイアログ)を持ち掛けてくる。最初に論述したように、子どもは他者や社会との善い関係が保障されてこそ、ゆくゆく育ちや幸福を経験することができる。こうした視点は、今回紹介した作品の中にモチーフとして認められたと同時に、実はこうした作品自体が、子どもの出会う他者世界の一翼を担い、子どもの育ちに一役買うことになる。

そして保育者は、子どもと作品との出会い(架橋)を演出することができるのみならず、多様な作品を消化した保育者自身が、言わば受容的な価値観によって統合された多様な相貌を内に秘めることで、子どもにとっての「重要な他者」として貢献することができるのである。

(註)

- (1) この他に、幼少期に受けた虐待に対して、自らの生を賭するかのように、そのトラウマを無意識的に乗り越えようとする若者の生き方を描いた小説に、『土の中の子供』がある。
- (2) この文章中には、エリの想像力によって乳児期の主観的な心情が構成され、物語として表現された箇所がある。さて乳児は一般的に、自らの主観的経験を言葉に置き換えて、他者に正確に伝達する能力を所持していない。したがって保育者などは自ら身を挺して、乳児の思いを汲み取る姿勢が欠かせないのだが、こうした文章は乳児の心情に対して、私たちに想像力を喚起させる効果がある。

さて、同様に乳児の心情の一部表現された代表的な小説として、『ジャン・クリストフ』をあげることができる。乳児が初めて目にする外界への驚きが、次のように表現されている。「赤児は眼を覚して泣く。その定かならぬ目差しは乱される。なんという恐ろしさだろう！深い闇、ランプの荒々しい光、渾沌のなかから出てきたばかりの頭脳の幻覚、周囲にたちこめている息苦しいざわめく夜、底知れぬ影、その影の中からは、まぶしい光線のように強く浮かび出してくる、強烈な感覚が、苦悩が、幻影が、こちらをのぞきこんでそれらの巨大な顔が、自分を貫き自分のうちにはいり込む意味の分らないそれらの眼が！……赤児は声をたてる力もない。彼は身動きもせず、眼を見開き、口を開け、喉の奥で息をしながら、恐怖のために釘付にされる」(Rolland1986:24)。

- (3) この他に発達障害をもつ子どもを題材にした絵本として、『たっちゃん ほくが きらいなのー たっちゃんは自閉症ー』『オチツケ オチツケ こうた オチツケーこうたはADHDー』を紹介する。これらの絵本は障害児保育が広がりをもつ中で、クラスの発達障害をもつ友達を正しく理解することを手助けしてくれるだろう。まず前者では、自閉症を次のように表現する。「きみはどうして、おかあさんをおかあさんとおもうのだろう。それはおかあさんのやさしいところをかんじとることができるから。かんじるアンテナがくるくるまわっているから。たっちゃんのアンテナは、ぎくしゃくまわる。だからこのころでんばが、くつきりとどかない。おかあさんのきもちがうまくつたわらない」(佐藤1996:14-19)。またADHDについては、

次のように表現されている。「ぼくはADHDなんだって。さんすうのにがてな車、おんがくの
にがてな車、みんないろんな車にのっている。ぼくがのってるADHDごうは、ブレーキがに
がてな車。ぼくがじょうずにのれば、この車はけっこうすごいらしい」(佐藤2003:24)。

(文献)

『朝日新聞 (大阪)』2005年10月17日

灰谷健次郎『兎の眼』角川文庫,1998年

橋本治「ふらんだーすの犬」『蝶のゆくえ』集英社,2004年

Jeanne Modesitt (Illustrated by Robin Spowart) ,Mama,If you had a Wish,1992. (=もきかずこ
訳『いいこって どんなこ』富山房,1994)

John Pierson,Tackling Social Exclusion,Routledge,2002.

Jos Berghman,Social Exclusion in Europe:Policy Context and Analytical Framework,

Graham Room ed.Beyond the Threshold:The Measurement and Analysis of Social
Exclusion,Policy Press,1995.

鯨岡峻・鯨岡和子『よくわかる保育心理学』ミネルヴァ書房,2004年

Mike Thaler(Illustrated by David Wiesner),Owly,Harper and Row,1982. (=せなあいこ訳『しりた
がりやの ふくろうぼうや』評論者,1992)

Marie Hall Ets,The Story of a Baby,Copyright,1967. (=坪井郁美訳『赤ちゃんのはなし』福音
館,1982年)

松居直『絵本のよこび』日本放送出版協会,2003年

中村文則『土の中の子供』新潮文庫,2008年

Peter Spier,People,Doubleday & Company,1980. (=松川真弓訳『せかいのひとびと』評論社,1982年)

Romane Rolland,Jean-Christophe,1904-12. (=豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ (1)』岩波書
店,1986年)

Ruth Bornstein,Little Gorilla,Seabury Press,1976. (=岩田みみ訳『ちびゴリラのちびちび』ほるぶ
出版,1978年)

佐藤敏尚作・宮本忠夫絵『たっちゃん ぼくが きらいなのーたっちゃんは自閉症ー』岩崎書店,1996年

佐藤敏尚作・宮本忠夫絵『オチツケ オチツケ こうた オチツケーこうたはADHDー』岩崎書店,2003年

重松清『疾走上』角川文庫,2005年A

重松清『疾走下』角川文庫,2005年B

Susan Varley,Badger's Parting Gifts,Andersen Press,1984. (=小川仁央訳『わすれられないおくり
もの』評論者,1986年)

田畑精一・先天性四肢障害児父母の会・野辺明子・志沢小夜子『さっちゃんのまほうのて』偕成
社,1985年

武川正吾『連帯と承認ーグローバル化と個人化のなかの福祉国家ー』東京大学出版会,2007年